

京都市京セラ美術館メンバーシップ

Members News



Vol. 01
July 2020

特集

建築が新しく、
鑑賞体験も新しく

DIALOGUE 青木淳 × 西澤徹夫

VISITORS' REVIEW 川勝真一／伊藤京子／橋本裕介

今号の一枚

犬に引かれ、着物の裾からすっと
前が出る裸足の足先——。
この作品に見覚えはありますか？
気になる方は裏面へ。

特集

建築が新しく、 鑑賞体験も新しく

2020年5月26日、3年間の休館を経てついにオープンした美術館。リニューアルした建築は、これまでにさまざまなメディアで取り上げられ、国内外から注目を集めています。今回は、設計を手がけた青木淳氏・西澤徹夫氏の対談と、京都の文化・芸術に携わる三者の印象を通して、新たな美術館の姿に迫ります。

Photo: Takeda Shingo

中央ホール（旧大陳列室）から日本庭園を望む。東側の扉が開かれたことで、長年裏庭のようにひっそりとしていた庭園が館内の景観のひとつになった。

DIALOGUE

青木 淳 × 西澤 徹夫

Aoki Jun

Nishizawa Tezzo

「新旧の対比を強調するのではなく、既存の建物と新たな要素を注意深く馴染ませるように改修した」という、今回のリニューアル。設計を手がけた青木淳氏・西澤徹夫氏のお二人が設計時に交わした京都市美術館についての考察や、試行錯誤のプロセス、建築に託した想いをひもとくことで、これからの京都市京セラ美術館の姿を想像していきます。

2020年6月8日(月)14:30-16:30 オンラインにて収録

PLAN

使い方と現れ方の変化で、 流れる空気を変える

——今回のリニューアルは、一見ただけではどこが変わったのかわからない、もとの建築を生かした改修となりました。設計プランはどのように組み立てていかれたのでしょうか？

青木 正直なところ、以前の京都市美術館は、少し息が詰まるような印象がありました。それが覆されたのが、2015年、京都市美術館をメイン会場に開催された「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭」(以下、「PARASOPHIA」)。東側の玄関にはカフェがあり、名和晃平＋SANDWICHの作品の傍らで高齢の女性がコーヒーを飲んでいて、すごく良い印象だったんですね。地下では高嶺格さんが作品を展示するなど、それまで閉じていた空間も使われていた。僕にとっては建物の魅力を再発見する体験でした。だから、今回のリニューアルでは、余計なことをせず、「PARASOPHIA」のような使い方がいつもできる状況をつくり出せれば、それで十分なんじゃない?と思いました。

西澤 歴史ある美術館にはオールドファンがいっぱいいます。だから、建物に対する敬意を払うということのほかに、通い続けてきた人の「あそこで展示を見たな」といった、折り重なった経験も大事にするべきだと思い、できるだけ変えずにこうと。たとえば、展示室の幅木なんて、展示のことを考えれば、今では邪魔だと思われるくらいの大きさですが、展示に苦労しただろうということも含めて、この美術館らしさだなと考えています。

青木 それから、平常時は閉ざされていた東側の扉を開き、西から東へ通り抜ける動線をつくる点も重要なポイントでしたね。

西澤 そうですね。以前は、西側正面の広場から美術館の外側をぐるっと回らないと、東側の日本庭園にたどり着けなかった。庭園にもちらほらと人はいましたが、知る人ぞ知る、といった感じ。今回の改修により、東玄関から日本庭園を望む視点場ができたことで、一切手を加えることなく日本庭園の印象を生まれ変わらせることができました。

青木 このように、美術館の外観や空間はそのままに、ただそこに流れる空気を爽やかなものにし

ようということが大切だったので、当初のプランではもとの建築をほとんど触っていないわけです。

西澤 当初のプランと実際に出来上がった建築の最大の違いは、新館「東山キューブ」ができたこと。もとは、あの場所にあった川崎清さんの収蔵庫棟を保存する計画でした。しかし、ボーリング調査で土地のわずか1～2m下に地下水が流れていることがわかり、予算などさまざまな兼ね合いのなかで、建て替えざるを得なくなりました。

青木 川崎さんの収蔵庫棟も美術館の歴史のひとつだから、気持ちとしては、残したかった。そこで、西澤さんと僕とで、どんなお気持ちでつくられたのかを聞きに伺いました。川崎さんは、建て替えは仕方ない、と。ただ、ご自身が美術館を半地下化したことを振り返り、東山との関係がとても重要なんだと、2時間くらいかけて話してくださいました。僕らも、その意思を引き継ぐつもりで「東山キューブ」を設計しました。

PROCESS

無限のバリエーションに対峙する 途方もないチューニング

——これまでも協働を重ねてきたお二人。どのようなプロセスで設計が進められたのでしょうか？

青木 西澤さんは東京国立近代美術館のリニューアルの経験があったので、本館の改装に関わる部分、それ以外の新しくつくる部分は僕の事務所と、最初は一応分担したのですが、そう単純にはいきません(笑)。僕の事務所の品川雅俊さん、亀田康全さん、永山紘章さん、西澤事務所の古園さわさんがチームとなり、僕の事務所の一角を占領して、隔てなく進めました。毎週土曜は、朝から皆が集まって、1週間やったことを議論する。これを2015年からこの間まで続けていました。

西澤 4年以上、ずっとですね。新築の場合と違って、あれだけ大きな建物のリニューアルでは、壊してみないとわからないことが無数にあります。多方に分岐し続けるプロジェクトのすべてを把握し、コントロールすることができないとしたら、発見された物事への対処の一つひとつやっていくしかありません。すると、一度解決したはずの問題に戻り、考え直すという往復が幾度も起こります。途方もない



Photo: Maetani Kai

青木 淳

あおき・じゅん

建築家。1956年神奈川県生まれ。東京大学工学部建築学修士課程修了。磯崎新アトリエ勤務を経て、

1991年に青木淳建築計画事務所を設立。代表作に、「潟博物館」(日本建築学会賞作品賞)、「ルイ・ヴィトン表参道」(BCS賞)、「青森県立美術館」など。広範な建築分野での設計のほか、美術家としての作品制作など領域横断的な活動を行う。2005年芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。2019年4月、当館館長に就任。

<http://www.aokijun.com>



Photo: Maetani Kai

西澤 徹夫

にしざわ・てつお

建築家。1974年京都府生まれ。東京藝術大学美術学部美術研究科建築専攻修了。青木淳建築計画事務所を経て、2007年に独立。代表作に、「東京国立近代美術館所蔵品ギャラリー」リニューアル、「八戸市新美術館」があるほか、住宅建築やリノベーションなども手がける。また、「ビデオを待ちながら」、「パウル・クレー展」、「Re:play展」(以上、東京国立近代美術館)など、展覧会の会場デザインも多数。

<http://tezzonishizawa.com>

チューニングのような作業です。たとえば、展示室の木枠の塗装色を既存の扉に合わせても、同じ色を並びのスチールドアに塗装するとちょっと違和感があったりして、さっき決めたルールが途端に破綻するなど。では、どこまで遡り、どこから先を違うルールにするのか……。無限の分岐をCGでシミュレーションして、いちばんダメージの少ない方法を選ぶという作業なんです。

青木 西澤さんが言った通り、はっきりとした像をもつ最終形にめがけて予定調和的に、「今何をすべきか？」なんてやり方はできなかったわけで。コツコツと、そのときに良いと思うことを、ただただやり続ける（笑）。もっともこれは、うちの事務所の普通のやり方でもあるし、たぶん西澤事務所も同じでしょう。「こういうことをやっていたんじゃないか」と、出来上がったときに発見できればそれで良い。でも、五里霧中の作業は精神的にきついですね。打ち合わせがはじまっても、1時間くらい誰もしゃべれなかったり。そういうことの連続で、傍から見たら「そんなの同じじゃない？」って言われるようなことを延々と考え、議論してきました。

西澤 そうですね（笑）。しかも、機能や危険性などと違い、色や形のジャッジって、最終的には主観の問題なんです。誰も違和感を感じない、ニュートラルな着地点を目指すしかありません。だから、ひとつのことを決めるのに何カ月もかかることも。

青木 こうするとおもしろい、いや、あざといか……。そんな行ったり来たりする論理をどこで止めるのか。なかなか論理的には答えが出ない。チーム6人皆が腑に落ちるまで、ぐるぐる回り続けるしかない。それでもよく、皆で同じ結論にたどり着けたよね。

西澤 相当偏った6人だと思いますけどね（笑）。でも、そうやっていくしかなかった。

青木 もちろん、美術館や場所の成り立ちを勉強したことが判断に影響したかもしれない。でも目の前にあるものの方が、ずっと強い。現実にあるものに、空想のなかでいろいろなアイデアを被せ、案が出来上がったら、自分が空間でどういう気分を味わうかをさらに想像する。それが良ければOKで、そうでなければNG。その繰り返しでした。

西澤 あとは、周辺環境に対する気配りは常にしていました。敷地全体に新しい気の流れができるか、どう明るくなるか。たとえば、以前はフェンスや植栽で隠れていたファサードが二条通りからしっかり見えて、鳥居を含む風景が一体として感じら

れる。また、スロープが一度下がってまた上っていくことによって、南北方向の伸びやかさが感じられるなど。これらは、造形の問題ではなく、環境との関係性を整えるということです。

青木 通常の「保存・修復」では、古いものを大事に育てながら、新しく手を加えるところは、明らかに新しいとわかるようにつくります。見る人が、新しいものを昔からあったものと勘違いするのを防ぐためです。しかし、僕らは、もともと建築が持っていたデザインの流儀を引き継いでいこうとしました。この場合、オリジナルに対する「近さ」の無限のバリエーションが生じてしまいます。

西澤 この「近さ」とは、新しく現れたものと以前からあるものの「継ぎ目」のつくり方のことです。たとえば、螺旋階段とバルコニーの笠木は、以前は存在していなかったものなので、素材や色を決める根拠がありません。まずは床と同系色の木材を当てはめてみて、同時に、エントランスから中央ホールへと続く階段の手すりにも同じ素材を用いる。この手すりを螺旋階段の笠木よりもずっと細い形状にすることで、新しい素材が徐々に、違和感なく中央ホールに現れるようにしました。

青木 僕たちは、「違いはあるが、継ぎ目はない」というつくり方を目指してきたわけです。

西澤 動線を整え、使い勝手を良くしようとする、必ず何らかのしつらえが暴力的に挿入される。その痕跡を完全に消すことはできないのですが、空間のなかに、面白く、とても自然な現れ方をする瞬間をつくれたら、暴力性がまぎれるかもしれない。それが建築の面白いところです。こうして、館内の一つひとつの素材があらゆる角度からどう見えるかをずっと考えてきたわけですが……。これ、何時間でも話せますよ（笑）。

STUDY

ノスタルジーではない 現在への思考

——今回、多様な展示室が生まれましたが、展示空間として、もとの建築をどうとらえていきましたか？

西澤 展示空間は、物理的な制約のなかで、できることと求められる機能の組み合わせを掘り当てていくような作業でした。照明のあり方やダクト



Photo: Kawata Norimasa, courtesy of Parasophia Office

「PARASOPHIA」開催時の東側エントランス。長年閉ざされていた扉が開き、開放的なカフェ空間になった。当時は写真左手の扉の先は屋外になっていたが、現在は東山キューブに続くガラス張りの回廊がある。外光が射し込む明るい印象が今回のリニューアルの構想に影響した。



Photo: Takeda Shungo

古くからあるタイルやレンガ、大理石などは、使えるものはそのままに、破損・老朽化したパーツは現代の職人の手で復元された。写真は「光の広間」の雨樋と壁面。雨樋のうち、緑青に覆われているパーツは以前からここにあったもの。壁面にも新しいタイルと古いタイルが混在している。

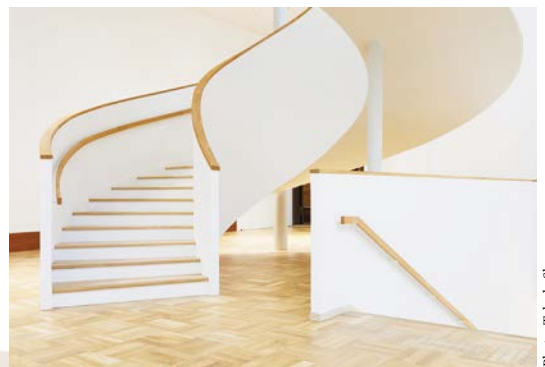


Photo: Takeda Shungo

中央ホールの螺旋階段と地下エントランスから続く大階段の壁面。手すりや笠木、階段の踏面の木の厚みが、それぞれに微妙に異なっていることがわかる。中央ホールの重厚な空間では太く厚く、ここへのアプローチとなる大階段では細く薄い。空間に溶け込む佇まいになるよう、さまざまな角度から検証されていった。



Photo: Takeda Shungo

代々受け継がれてきた展示ケース。通称「電車ケース」。両面仕立ての重厚なしつらえは、展示室の壁面にあしらわれた太い幅木とよく似合う。青木さんが残してきたいと感じた、京都市京セラ美術館の個性のひとつ。



Photo: Takeda Shungo

リニューアルで新たに整備された「京セラスクエア」。設計時は「スロープ広場」と呼ばれていた。なだらかなスロープが上下することで生み出された視界の広がりや、西澤さんが特に注力した景観のひとつ。右奥に見える櫟の木は、以前と同じ場所に立ち、人が憩う場として今も変わらず親しまれている。

など、すべての展示室の条件が違いため、結果として展示室ごとに異なる空間が出来上がりました。

青木 展示室はそこに作品が入ったときに「完成形」。だから、建築家は「完成形」になるためのプラットフォームをつくるまでが仕事です。「完成形」をつくるのが仕事ではない。作家がその空間に向き合い、自分の世界をつくっていくための、良いきっかけになる空間を設計しなくてはいけません。それが昔、磯崎新さんの事務所で働いて、教わったことです。京都市京セラ美術館の展示室は、たいへん個性的だけれど、もう、できた当時の意図は背景に引っ込んでいて、そのまま良い展示空間でした。だから、そのまま良い。しかし、まだ冷房のなかった創建当時の1933年と違い、現代の美術館では、温湿度調整のためのたいそうな設備を設置する必要がありました。つまり、必要に応じて変えつつ、でも、変わったようには見せない、という。

西澤 そうやってなんとか整理した空間には、オリジナルから引き継いだ癖のようなものが残っています。その延長上で、さらに空間に解釈を加えるような展示ができたら面白いのではないのでしょうか。建築のプロセスとは切り離されたところで作品をインストールするのとは違い、建物と作品が地続きにつながる可能性があると思っています。

青木 「東山キューブ」は、大きな空間を仮設壁で仕切って使うワンルームで、個性がないように思われるかもしれませんが、出入口が何カ所もあり、展示室内に柱が2本立っているという、個性があります。必要に応じて生まれてくる個性は良いもので、必ずしもニュートラルであることが良いこととは言えない。たとえば、本館には、「最初の一步：コレクションの原点」の最後の展示室で使われた、「電車ケース」と呼ばれる巨大なガラスの展示ケースがあります。この展示ケース、本館の太い幅木にすぐく合うと思いませんか？ 世界中の美術館がみんな同じ方向を目指すのではなく、それぞれの個性があるほうが良いと思いますね。

西澤 それは、ノスタルジーではないんですね。誰かが一生懸命考えた、あの太い幅木と電車ケースの関係。それを前向きにとらえ、「これがあるならどうしよう？」と考えていくことは、現在について思考していくことなので。

青木 そうそう、京セラスクエアの南側にある櫟けやきの木のこともありました。リニューアル前、あの櫟の下

には、いつも休憩する人の姿があったため、場として生きている木だから残さなくては、と思いました。ところが調べてみると、創建当初にはない、たまたま生えてきた木で、由緒は正しくないことがわかった。でも、歴史的に価値がなくとも、うまくいっているものは残さなきゃいけないと思ったわけです。

西澤 工事には邪魔でしたが、あの櫟だけはなんとか守ってもらいました。一種の特等席というか。木がなければさっぱりした前庭になっただろうけど、残していなかったら、人がいられる場所にならなかったとさえ思うくらいです。実際に今、美術館の前では、建物の真正面に座って美術館を眺める人と、ちょっと櫟側に座る人がいて。当初は、そこまで想定していなかったのですが、憩いの拠りどころになっているのだらうと思います。

THINK

接続する場と誤読する空間へ

——青木さんが館長に就任された今、お二人は「美術館」をどのように思考していますか？

青木 実は、西澤さんの「なったら面白いじゃないですか」という言葉が、自分が館長職を受ける可能性があるかを考えはじめるきっかけになりました。館長は英語でディレクター。館の進む方向をディレクションする仕事です。僕が磯崎アトリエ時代に担当した水戸芸術館は、吉田秀和さんが亡くなるまで館長を務められましたが、鎌倉に住んでいらっちゃって、美術館に詰めていたわけではありません。でも、彼は館の方向をはっきりとつくっていった。僕は吉田さんのようにはできないだろうけど、建築家としてソフトからハードを考えてきたこれまでと立場を変えて、今度は、ハードからソフトを考えていくことも、館にとってプラスになるのかもしれない、と考え直したのです。

西澤 青木さんが館長就任の依頼の電話を受けたとき、僕、隣にいたんですよ。青木さんがめずらしく後ろ向きな口調で電話を切った後、「やったらいいじゃないですか？」と軽い気持ちで言いました。設計時のことを知る人が担えば、空間の使い方について、「ここまで過激にやっても大丈夫」というギリギリのサンプルを用意できるし、自作自演的なところも面白いと思ったんですよ（笑）。

青木さんは、今、館長として何を考えていますか？

青木 これからの美術館のあり方を探っていくにあたり、最も大事だと考えているのが、メンバーシップです。美術館はたくさんの方々の力で運営されますが、美術館たる大切な部分は、京都に住んでいる人を中心とした市民の一人ひとりが、日常生活において「この美術館はなくてはならない存在だ」という感覚を持てるかどうかにかかっています。その感覚を持つ方々の層を少しでも厚くしていくことが、本当に大切です。今まで、この美術館は自分と関係ないと思っていた人に、どうしたら「なくてはならない」と感じてもらえるのか。美術館ですから、アートを紹介することが前提になりますが、この場での経験を必要とする人たちの層を広げたい。アートというのは、人が本来的に持つ、何かを「つくる」ことに関わるモノであり、コトです。人はそれを通して「皆と同じ価値観、感覚で生きていなくていい」と勇気づけられ、背中を押されます。なにも、従来の「美術」と呼び習わされてきたものだけがアートではありません。それは、マンガやアニメであるかもしれないし、衣服や食べ物、ただ話し合うことかもしれません。そんな広い意味でのアートを中心にして、人々が行き交い、交流できる空間になってほしい。

西澤 僕は、今、展示室じゃないところの無駄がいかに多いかが重要だと思っています。八戸市新美術館で提案している、800㎡の何もない空間「ジャイアントルーム」は、美術館をさまざまなプログラムができるラーニングセンターとして機能させるための構想です。京都市京セラ美術館の場合も、京セラスクエアをはじめ、館内外に大量の余白空間が生まれました。このような、空間を誤読できる余地がないと、場を面白く使うことはできない。多少の無理があっても、それをクリアするアイデアを出して可能性を広げていくのが公共施設の役割で、展覧会が空間の誤読を率先してやっていくことが、ものの見方を広げることにつながるのだと思います。そのプロセスを可視化していくことが、メッセージになっていくのではないのでしょうか。

青木 実を言えば、展示室だってそうであってほしい。すべてが無駄というか余白であり、何に使うかは決まっていなくて、僕はこれまで「原っぱ」と呼んできたわけだけど、この美術館全体がそんなふうで、使うなかで思わぬことを発見できる余地として育ってほしいですね。



建築リサーチャー／RAD
川勝 真一

美術館をくぐる

今回のリニューアルでとても楽しみにしていたのが、ゆるやかなスロープ状の広場による建築へのアプローチだった。世の中には数多くの美術館が存在するが、「くだる」という建物へのアプローチを採用しているものは比較的めずらしい。たとえば、お向かいの京都国立近代美術館は入り口が数段高い位置にあり、さらに大階段の先に作品が展示されている。このように美術館のアプローチは「のぼる」が一般的なのではないだろうか。しかし、京都市京セラ美術館の場合は逆だ。ただし、「くだる」だけでなく、既存建物の下を通り、メインホールへと抜けるまでの流れをアプローチとして考えることもできる。だから、「くだる」ではなく「くぐる」の方がしっくりくるかもしれない。くぐるという経験によって、価値観や感覚が一旦リセットされたような感じが生み出されるのは、茶室の躡口（「くぐり」ともいう）を思い出させる。作品とだけでなく自己や世界との新鮮な出会い直ちに期待して、美術館へのアプローチをくぐり抜けてほしい。

かわかつ・しんいち キュレーションや出版、市民参加型ワークショップの企画運営、都市利用提案などの実践を通じ、建築と社会の関わりや建築家の役割についてリサーチしている。



Photo: Takeda Shungo



細見美術館
主任学芸員
伊藤 京子

収蔵品をより愉しめる館に

細見美術館が岡崎の文化ゾーンに開館して以来、さまざまな形で交流をしてきた「市美さん」が、「京都市京セラ美術館」という新たな姿で帰ってきたことを嬉しく思います。久しぶりに出かけた馴染みの空間。これまでになかった新たなつくりや装飾を見つけた際には胸がときめきました。一方、繊細な意匠がこれまで同様に大事にされていたことにも安堵。新旧が見事に一体化した本館、現代アートを愉しめる東山キューブに、アプローチのしやすい庭園は、刺激と飲びの発信地となること間違いなしですね。とはいえ、オープン直前から見えない敵に幾度となく振り回され、そのご苦労は計り知れないものだったと思います。そして、今や業界は展覧会、収蔵品のあり方を見直す事態に。奇しくも豊富なコレクションを定期的に展示することを、再始動の大きな軸のひとつに掲げた貴館。今こそ、京都ゆかりの作品群を、より多くの方々にご覧いただける絶好の機会となるはず。心地よい空間での、収蔵品との新たな出会いや再会を心待ちにしています。

いとう・きょうこ 1970年生まれ。大学卒業後、損害保険会社勤務を経て、1996年より大倉集古館学芸員として勤務（～2004年）。2005年より細見美術館勤務。



ルームシアター京都
プログラムディレクター
橋本 裕介

意志は細部に宿る

職員の方に案内されて、鑑賞者のいる開館後の京都市京セラ美術館を巡った。私の目に留まったのは、劇場という施設で仕事をしている^{さが}性かもしれないが、手すり・サイン・ベンチ・ベルトパーティションといった、来館者の移動を助けるものだった。聞くとところによれば、既製品とオリジナルを組み合わせた、すべて青木館長のディレクションによるものとのこと。手すりは細く建物に馴染んでいるが、かといって目立たないわけではなく、自然と手が伸びる。表示内容が展覧会によって変わるサインケースは、簡単に、かつ美しく普通のコピー用紙をセットでき、ベルトパーティションとも連動する。ある意味、強制的に来館者を仕切るベルトパーティションも、適切な存在感で人々の移動を方向づける。禁止や指示や注意によって来館者とコミュニケーションをとるのではなく、青木館長の「想い」にナビゲートされながら、自然と調和を保った人々の流れと空間が出現していた。次はベンチで少しゆっくりしてみよう。

はしもと・ゆうすけ 1976年福岡生まれ。2010年よりKYOTO EXPERIMENTを企画、2019年までプログラムディレクターを務める。2014年よりルームシアター京都勤務。



Photo: Takeda Shungo



Photo: Takeda Shungo

メンバーシップだけに こっそり教える 展覧会の裏話

Illustration: Asano Peko

担当学芸員だからこそ知っている、展覧会の裏側や作家の横顔。
今号では、現在開催中の展覧会にまつわる3つのエピソードを
学芸員がご紹介します。ぜひ鑑賞のガイドにしてみてください。

学芸係長 中谷至宏による

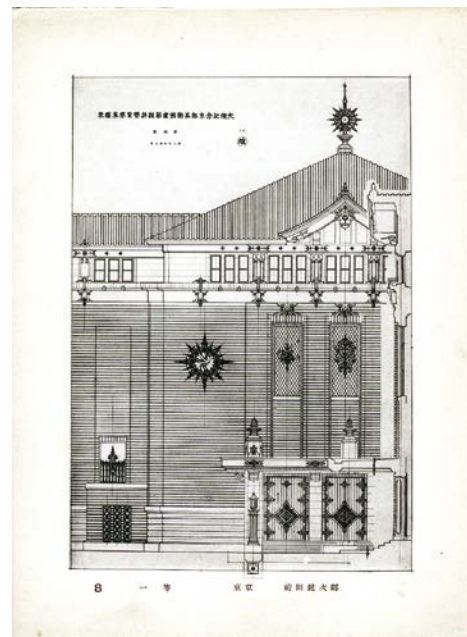
京都の美術250年の夢 最初の一步：コレクションの原点 の

代々受け継がれた、とっておき！ の話

その昔、先輩学芸員が「電車ケース」と呼んでいた重くて大きな展示ケース。1933（昭和8）年の開館時に製造されたこのケースは、1946（昭和21）年に美術館本館が米軍に接收されたとき、当時、京都市所管であった恩賜京都博物館（現京都国立博物館）まで運ばれ、6年後の接收解除時に美術館に戻されました。塗装が剥がれ傷だらけであったため、今回、漆塗りで修復を施し、「最初の一步」展の資料展示で用いることにしました。プレートには「佐藤金庫製作所鋼鉄家具製作部製造」とあり、大阪市内の住所も記されています。この会社は、1915（大正4）年創業の金庫製造会社で、戦後も存続していたようで、

1953（昭和28）年には株式会社丸善の子会社となっていることがわかっています。このケースでの展示の見どころのひとつは、美術館本館の設計競技で一等賞となった前田健二郎のオリジナルのコンペ図面です。私自身、印刷された図面は目にすることがあったものの、オリジナル図面を見たことはありませんでした。実は、資料展示の準備中に偶然この図面を見つけ、展示することになりました。着色された透視図、詳細図の線の美しさ、立面図の影の表現など、手仕事の迫力が目を引きまします。ぜひ会場で80年物のケースとともに注目してください。

電車ケースの写真は3ページに掲載しています。



前田健二郎 立面詳細図

会期 9月6日「本館北回廊1階」



事業企画推進室 アソシエイト・キュレーター

国枝かつらによる

杉本博司 瑠璃の浄土 の

これは運命！としか思えない 話

人々が浄土を希求した末法の時代、白河院が院政を敷いた岡崎には、6つの大きな寺院が存在していました。出品されている《法勝寺 瓦》は、お隣にある京都市動物園の敷地にあった法勝寺の跡地から発掘されました。奇しくも、当館での展覧会を杉本さんをお願いしたタイミングで、杉本さんの倉庫からこの瓦がひょっこり出てきたといいます。「展覧会をやりなさい」と言われているような、何かの因縁を感じたという杉本さん。「瑠璃の浄土」はそんな縁から出発した展覧会です。



《法勝寺 瓦》平安時代



杉本博司さん

会期 10月4日「新館東山キューブ」



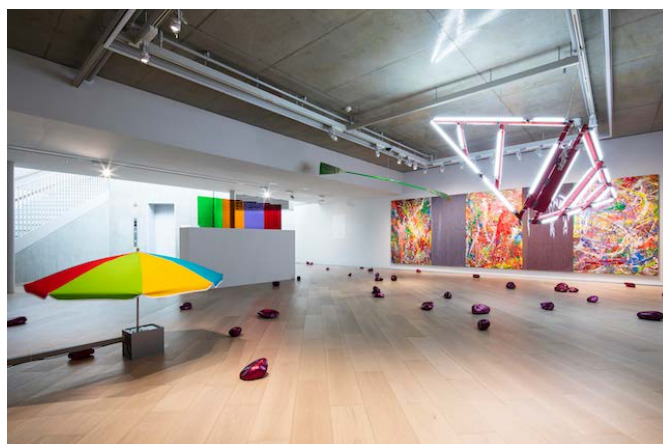
事業企画推進室 キュレーター

野崎昌弘による

鬼頭健吾：Full Lightness の

影響を受けましたよね!? の話

鬼頭さんは映画もよく見るし、ロックやその他もよく聴き、実に詳しいです。絵描きにはそんな人が多いですね。鬼頭さんも実は絵描きであって、展覧会の中心となる作品は《cartwheel galaxy》というキャンバスの新作です。それに加えて三角形のやや暴力的なLEDライトの作品が印象的です。難破したスペースシップに見えてなりません。デイヴィッド・ボウイの「スペース・オディティ」に影響を受けてます、きっと。



「鬼頭健吾：Full Lightness」の展示風景（2020）

会期 9月6日「ザ・トライアングル（北西エントランス地下1階）」



新設！ コレクションルームに潜入取材

所蔵する全ジャンルのコレクションを、いつでも鑑賞できるようになった常設室。その企画や展示の舞台裏をレポートします。

季節ごとに約100点もの作品が展示されるコレクションルーム。ここでは、所蔵品それぞれのユニークさを、鑑賞者自身に発掘してもらうことを目指しています。たとえば、名画と名高い浅井忠の《グレーの柳》。春期の展示では、あえて最も目に留まりやすい場所を避け、弟子たちが描いた風景画とともに横一列に並べられました。作品同士の関係性を丁寧に再編し、一点一点にスポットを当てることで、名画を名画として楽し

むこと以上に、鑑賞者に自分にとっての名作を見つけてもらうことを試みています。なかには、企画からオープンまでに、何度も配置を変えた作品もありました。

作品の魅力を引き出すための工夫は枚挙にいとまがありませんが、特に象徴的なのは照明です。リニューアルで新たに導入された機材を用いて、光の色温度や全面をフラットに照らすか、部分をスポットで強調するかといった調整を作品ごとに細かく



欧州で学んだ画家たちの洋画が並んだ春期（～6月21日）の展示。中央は、浅井忠《グレーの柳》(1901)

Photo: Takeda Shungo

指定しています。たとえば、富岡鉄斎の屏風《漁樵問答図》はすっきりとした白い光で照らし、村上華岳の軸《阿弥陀》は温かみのある光で照らすといったように。言われてもつぶさには認識できないような違いが、作品一つひとつに没入できる鑑賞空間を生み出しています。現在開催中の夏期（6月25日～9月22日）は、上村松園や竹内栖鳳の名画がお目見え。ぜひ、その横に並ぶ作品にも注目してお楽しみください。

STAFF PORTRAITS
01

学芸課

中山摩衣子さん

Q 専門・研究分野は？

A 20世紀初頭の西洋美術です。研究対象は男性用小便器を素材にした作品《泉》で知られる、フランスの作家マルセル・デュシャン。

Q 好きな美術館をひとつあげるなら？

A アムステルダム市立美術館ですね。古い建物を生かして現代アートの展示室を新築するなど、京都市京セラ美術館と通じるところも。

Q 美術館周辺のお気に入りスポットは？

A 白川沿いの道。毎朝通勤時に地下鉄東山駅から歩くのですが、静かな町並みを流れる清らかな川の風景は落ち着きますね。



STAFF PORTRAITS
02

警備

相馬裕樹さん

Q これまでどんな施設で警備をしてきましたか？

A 去年は、関東のスタジアムで、ラグビーワールドカップの会場警備を経験しました！ 実は、美術館への配属は今回がはじめて。

Q 1日の流れを教えてください。

A 出勤したら前日の担当者から引き継ぎを受け、館内外を巡回。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、検温にも力を入れています！

Q 心に残る美術館体験は？

A 学生時代、地元の宮城県美術館で観たミレー展です。美術に疎かったのですが、《羊の毛を刈る女》にはすごく惹き込まれました。



京都市京セラ美術館
メンバーシップ
Members News の



タイトル募集 継続中！

本誌について

これまでの友の会ニュースをより充実させた新たなメンバーズニュースでは、美術館をさまざまな角度から紹介し、学びや発見のある企画をお届けします。京都市京セラ美術館の多様な関係性を紡ぎ、メンバーの豊かな美術館体験を後押しするメディアとして、みなさまとともに育てていきたいと思っています。

アイデアのヒント

- 1 メンバーシップ(旧友の会)の発足は1957(昭和32)年。以来60年にわたり、芸術を愛する会員が美術館活動を支えてきました。
- 2 1933(昭和8)年、関西の財界や市民の寄付により建てられた帝冠様式の本館は、日本の公立美術館として現存最古の建築です。
- 3 今回のリニューアルでは、人々の経験が多重露光写真のように折り重なった美術館の歴史を引き継ぎ、既存の建物と新たな要素を注意深く馴染ませるように改修されました。

美術館の歴史をさらに詳しく
知りたい方はこちらを Check
<https://kyotocity-kyocera.museum/greeting>



創刊準備号にて、本誌のタイトルを公募していましたが、募集期間が短いというお声があり、多くの方々にご参加いただけるよう、この度、募集期間を延長させていただくことにしました。みなさまからの更なる素敵なアイデアを、お待ちしております！

審査員

メンバーシップ 会長 白波瀬誠(京都中央信用金庫理事長)
メンバーシップ 顧問 青木淳(当館館長)
メンバーシップ 事務局長 川口伸太郎(当館副館長)
審査員・青木淳よりひとこと「当館のイメージを持っていてかつみんなに親しまれる名前がいいですね！」

プレゼント

採用された方に以下2つをセットで贈呈します！



京都市京セラ美術館
オリジナルサコッシュ



コレクション公式カタログ
『京都市美術館名品百選』

応募方法 郵便ハガキにて下記の項目を明記の上、応募先までお送りください。
①タイトル案 ②ネーミングの理由 ③お名前 ④会員番号
⑤ご住所 ⑥お電話番号 ⑦メールアドレス(任意)
⑧ペンネーム(任意)
応募先 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町124 京都市京セラ美術館 メンバーシップ事務局宛
TEL: 075-771-4107 FAX: 075-761-0444
応募締切 2020年8月15日(土)当日消印有効
応募資格 メンバーシップの有料会員

※次号で採用されたタイトルとお名前を掲載させていただきます。ペンネームをご記入された方は、ペンネームを掲載します。※ご応募いただいたハガキは返却しません。※ご記入いただいた個人情報は、本公募以外の目的で使用することはありません。※採用タイトルの著作権、使用権など一切の権利は京都市京セラ美術館に属します。※応募はお1人様につき1回に限ります。

今号の一枚

きくちけいづ

菊池契月《散策》

制作年 1934(昭和9)年

サイズ h173.0×w173.5cm

材質・形状 絹本着色、額

案内人

中谷至宏 1987年から当館で働くベテラン学芸員で、専門分野は近世・近代・現代美術史。趣味は庭の草むき。



作品解説

古典に倣う歴史人物画に取り組んできた契月が、同時代の女性風俗を描いた、『少女』(1932)、『友禪の少女』(1933)に続く、後期の代表作。

今号は、洋犬2匹とお散歩する少女の姿を描いた《散策》。学芸係長・中谷さんとおしゃべりしながら鑑賞します。

—— 清々しさを感じる作品ですね。おかつぱの髪もさらさらとなびいて風が気持ちよさそう。そうですね。さわやかな春の風吹く作品です。植物を調べてみると、頭に結実しているのはカエデ、足元にはスマレの蕾(タチツボスミレかな)、左には花を咲かせるカイドウ。この枝がにこいですよね。



—— 春に向かう喜びが感じられますね！ お着物もモダンで素敵だなと思いました。鮮やかで大ぶりな柄ははりのモードだったんじゃないかな。着物の着こなしも、黒い洋犬を連れている感じも、当時の豊かな暮らしを表しています。あまりに若々しいモチーフなので、発

表した当初は、多くの人が契月の絵だとは気づけなかったそうですよ。

—— そんな契月らしからぬ作品なんですか!? いえいえ(笑)。たとえば、女性と犬による三角形の構図は契月らしい特徴です。本作の前年・前々年に描いた女性の絵も同じく三角形の構図ですが、安定感のある横長の構図。一方、動きのある本作は、生を謳歌するような軽やかさが新鮮だったんでしょうね。また、表紙でフォーカスした爪先の立体感と、顔や髪の毛に見られる様式的でフラットな表現もポイント。契月の巧みなバランス感覚と表現力も楽しめる一作ですね。



法人メンバーとして以下の法人のみなさまにご加入いただいております。

京都中央信用金庫/株式会社長谷ビル
CCCアートラボ株式会社/株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント

株式会社片岡製作所/親友会グループ/日本管財株式会社/PwC京都監査法人/株式会社ブランコ/株式会社宮木電機製作所

公益財団法人稲盛財団/株式会社実業広告社/サントリーパブリシティサービス株式会社/株式会社マツシマホールディングス/カリモク家具株式会社/株式会社教映社/共栄セキュリティサービス株式会社/株式会社京都銀行/株式会社京都ホテル/コクヨ株式会社/サンセイ株式会社/秀和株式会社/株式会社松栄堂/セコム株式会社/株式会社伏見工芸/株式会社三井田商事/ミネバアミツミ株式会社/株式会社YAMAGIWA/ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社/株式会社ユニオン

法人メンバーについてのお問い合わせ
dev@kyoto-museum.jp

新型コロナウイルス感染症 対策に関するお知らせ

当館では当面の間、同感染症の予防・拡散防止のための取組として、事前予約制による観覧の受付、来館者の体温チェック等を実施しています。メンバーシップの会員の方についても、事前予約をされていない場合、美術館への入館自体ができません。なお、6月19日より京都府外からの来館も可能となりました。事前予約制の詳細については、美術館のウェブサイトをご参照いただくか、お電話にてお問い合わせください。

MY PAGE

メールアドレスを登録されている方は、マイページへログインすることができます。メールアドレス未登録の方は、こちらからご登録ください。



CAFE/SHOP Information



京の素材のおかずプレート
1,200円(税込)

エンフーズ
ENFUSE

京都にゆかりのある食材をふんだんに使ったおかずプレートをご用意ください。味、見た目の彩りとボリュームに、きっとご満足いただけるはずです。赤米のおにぎりや北山・吉田パンさんのパンを合わせて、また、自然派ワインや京都醸造のクラフトビールと一緒に楽しむのもおすすめです。



人気の季節のコーディアルなど、オリジナルグッズも多数。

アート ラボ
ART LAB KYOTO

ホワイトとグレーを基調にデザインされたショップでは、展覧会グッズはもちろん、京都の伝統文化から現代美術まで楽しめる書籍・グッズなど、豊富なラインアップを展開しています。なかでも、アーティストとのコラボレーションアイテムや限定スイーツは、ぜひお見逃しなく。

📢 メンバーズカードを提示すると、カフェとショップで5%割引が受けられます! カフェは1,000円以上のご利用時に、ショップは雑貨・洋書のご購入時に適用となります。